

野村正良先生をしのんで

山 田 達 也

(愛知学院大学)

長年にわたって本学会の役員をお務めになりました名古屋大学名誉教授野村正良先生には、平成3年12月9日夕刻御逝去になりました。ここに謹んで哀悼の意を表させていただきます。

先生は大正3年12月3日、国文学者野村八良博士の御長男として、東京市麹町で御生誕、東京府立第六中学校、東京高等学校を経て、東京帝国大学文学部言語学科に御入学、服部四郎博士の指導を受けられた最初の学生として、昭和13年3月に同科を御卒業になりました。卒業論文は「蒙古語喀喇沁方言音韻論」でありました。

御卒業後、満州国政府民生部囑託、帝国学士院に於ける東亜諸民族調査囑託に於かれた後、昭和19年4月に在張家口西北研究所の勤務に着かれました。その間、昭和17年4月から8月にかけて、中華民国山西省晉南、晉北地区及び蒙疆において、シナ語方言、蒙古語、新ウイグル語などの調査をなされましたが、その資料は、終戦の中で、中国側によって押収されたと聞いています。御帰国後は再び服部先生の御指導のもとで蒙古語方言の研究に従事されました。そして、この間の御努力の成果は、『民族学研究』1941、『蒙古』1941、『民族学年報』1941、『帝国学士院東亜諸民族調査、報告会記録』1943、『回教圏』1943、『人類科学』1950などの諸誌に御発表になり、本会の『言語研究』にも「蒙古語喀喇沁中旗方言に関する若干の覚書——内蒙古方言研究資料」(第9号)1941、“Remarks on the Diphthong [wa] in the Kharachin Dialect of the Mongol Language”(第16号)1950などが掲載されました。

先生は跡見学園を経て、昭和25年4月、名古屋大学文学部に御着任になりました。この時期は、戦後の混乱の中で文学部が創設されてから、わずか1年半し

かたっていない時で、文学部文学科言語学の名前はあったものの、実質は無に等しい状態でありました。この中で始まった先生の講座作りには、荒地を切開いて畑を作る人の苦しみがありました。しかし、この、先生の御苦労も徐々に報いられ、昭和30年代後半に入って、キャンパスの移転が行われた頃には、書籍も増え、文献類も整って来ました。また、昭和38年頃には音声の音響学的研究に必要な各種機器を備えた実験室も出来ました。いつに、先生のお骨折りの賜物であります。

このような雑務の間にも、先生は、蒙古語を中心とした御自身の研究を休みなく続けられ、次々と貴重な、数多くの論文を御発表になりました。本誌掲載の“Supplementary Notes and Additions to Remarks on the Diphthong [wa] in the Kharachin Dialect of the Mongol Language” (第17, 18号) 1951, 「山西諸方言に於ける明泥娘疑母の頭韻」(第19, 20号) 1951などもその一部であります。また、「中国語察哈爾南部方言に於ける鼻音に終る韻類」(『金田一博士古稀記念, 言語・民族論叢』(三省堂) 1953 や “On some Phonological Developments in the Kharachin Dialect” (*Studia Altaica Festschrift Für Nikolaus Poppe*), Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1957) のような、国の内外の碩学の記念論集にお寄せになったものもあります。さらに、周知の、市川三喜・服部四郎共編『世界言語概説, 下巻』(研究社) 1955 では、「蒙古語」を分担されました。そして、これらのたゆまざる御研究の成果として、昭和37年3月に「原蒙古語の母音体系に就いての研究」により東京大学より文学博士の学位を得られました(采華書林, 名古屋より出版, 1979)。

昭和36年9月より37年12月まで、先生にはミシガン大学の Department of Far Eastern Languages and Literatures にて日本語学を講じられました。これが契機となって、アメリカ構造言語学を一層広く御研究になり、御自身の理論を深め、御帰国後は従前にまさる活発な研究活動を続けられることになりました。

先生の御研究は日本の代表的なアルタイ言語学者としてのお仕事を中心でありましたが、一方ではその御活動は日本語方言の研究にも及んでいました。これは個別の具体的言語事象の厳密な実証的研究を通じて、言語の普遍性を追求される

先生の学風からすれば当然のことかも知れません。「三河方言及び尾張方言に関する言語年代学的計測値」(『名古屋大学文学部研究論集』XVI) 1957、「愛知県西春日井郡北里村」(『日本方言の記述的研究』国立国語研究所) 1959、「岐阜県揖斐郡徳山村戸入方言の記述的報告及び成立過程に就いての二三の考察——付アクセントの分布と変遷——」(『名古屋大学文学部研究論集』LXX) 1977 などが、その御研究の一端であります。この最後の論文は、昭和51年、先生が本学会第72回大会の運営委員長をお務めになったとき、自から御報告されたものに基づいております。

昭和53年3月に御退官になった後も、御自宅にて研究に御専念になり、「服部四郎先生と蒙古語・アルタイ言語学の方法」(服部四郎編『言語学ことはじめ』) 1984のような御発表がありましたが、無念にも、病魔の襲うところとなりました。一時、小康を得られたこともありましたが、昭和63年に勲三等旭日中綬章を受章されました後、一段と健康を害され、遂に不帰の人となられました。77歳と6日であります。ひるがえって考えますと「真なるもの、美なるもの、敬するもの」に己を空しくして傾倒されるところに先生のお人柄の特徴があり、世俗を超越して、言語学の王道を一途に辿られたところにその真髓がありました。その野村正良先生も今や去られました。先生が身を以て示されました無言の教えを今一度噛みしめて、それぞれの研究を進めることが、残された者の責任だと思えます。

先生、どうか安らかにお眠り下さい。